

*The Handmaid's Tale** における 旧約聖書の意味

上 田 みどり

1. 序

マーガレット・アトウッド [Margaret Atwood (1939-)] の近未来小説, *The Handmaid's Tale* 『侍女の物語』(1985) は, ピューリタニズム的色彩の濃い架空の全体主義国家の中で, 語り手である女性主人公オフレッド (Offred) が, 旧約聖書の侍女 (handmaid) の役割を担いながら, 管理統制社会にいずれ革命が起こり自由な社会が再び戻って来ることを信じて生きる過程について描かれたものである。自由社会であったはずの過去の回想と抑圧された現在との混在する時間の流れにそって, この作品には聖書(主に旧約)に関わる多くの言及が見出される。そして作者はこの作品を, 二人の人物に捧げている。一人は, 17・18世紀のピューリタン研究の権威であり, 恩師でもあるペリー・ミラー [Perry Gilbert Eddy Miller (1905-63)]⁽¹⁾ に, そしてもう一人は, 作者の先祖で, 魔女として絞首刑に掛けられたが生き延びた女性, メアリー・ウエブスター [Mary

* テキストは, Margaret Atwood, *The Handmaid's Tale* (Houghton Mifflin Company, 1986) を使用した。本文引用はすべてこの版からであり, 頁数は引用に続けて, 括弧に入れて示す。

(1) アトウッドは1962年に Radcliffe College, 1962-1963年, 1965-1967年に Harvard University で教育を受けている。Kathryn VanSpanckeren, Jan Garden Castro *Margaret Atwood: Vision And Forms* (Southern Illinois University, 1988) p. xxix. A Margaret Atwood Chronology による。

Webster²⁾である。これらのことを考え合わせてみると、この作品にピューリタンの背景を読み取ることは容易であるし、旧約聖書の示す“救いのメッセージ”を基本にした「primitive な物語」を下敷きにしているとみなすことも可能であろう。

以下の拙論は、こうした聖書との関りが、この作品にどのような効果を及ぼしているかを考察するものである。

2. 時と場所について

作品の舞台となる場所は、架空のギレアデ共和国 (The Republic of Gilead) である。架空といっても、このギレアデ (Gilead) という国は、『旧約聖書』の「民数記」(Numbers) に登場する。別名「荒野の書」と称されるこの歴史書の部分に、ギレアデは家畜に適する土地であるため、イスラエルの民が戦いに出るのに、ルーベン族とガド族は動かないでそこに留まるとモーゼに申し述べて主の怒りに触れ、その世代が姿を消すまで、その両部族は40年もの間、荒野をさまよわねばならなかったとある。その後、神との約束を果たす為、ガド、ルーベン族の子孫等は、子供と女と家畜の群れをギレアデに残し、皆戦いにでる。負ければその土地は自分達のものではなくなるからである。⁴⁾

この作品にも、こうした戦いが、ギレアデのすぐそばで起こっているようであるのだが、その実態は国家統制を受けているらしく、主人公の様な侍女には、正しく伝わってこない。次の引用には、作品の中でのギレアデの置かれている状況が描かれている。

This is the heart of Gilead, where the war cannot intrude except on television. Where the edges are we aren't sure, they vary, ac-

(2) 馬場美奈子、「英語青年」(研究社増大号、1991年1月)、p. 12.

(3) 現在の場所であれば、Jordan 川の東の山岳地方 (Gen. 37:25)

(4) 『聖書』「民数記」(「荒野の書」) 32章、1-39

ording to the attacks and counterattacks; but this is the center, where nothing moves. The Republic of Gilead, said Aunt Lydia, knows no bounds. Gilead is within you. (p. 23)

引用文によれば、ギレアデの地の中心にいる住民は、周りに起こる戦いを知らず、そのことを考えないよう仕組まれているようである。なぜならテレビの情報も操作されているようであるし、引用文にもあるように、国の境界線は、戦争により常に変化している。ただ、共和国側の侍女達に命令を下すリディア伯母さん (Aunt Lydia) と称する監督官が、国に協力する精神を教育し、国の安全性を保証するため侍女達に国への忠誠心を促しているようなのである。

その後聖書では、ルーベン・ガド人は神に対する約束を守ったので、ギレアデの地は彼等に与えられることになるが、ギレアデという言葉は元来ラテン語では“hard”や“rough country”の意味で使われる。そのような荒野におけるヘブライ人の歴史は決して自慢になるものではなく、エジプトでの楽な生活をなつかしがり、神に不平を鳴らし、モーゼの正当な権威に背こうとする頭の鈍い民の歴史として描かれている⁽⁵⁾。それは、この作品の中のギレアデ国の歴史としてながめる時、国の間違いに気づきながら対立行動を起こそうとも、一個の人間が如何に無力であるかを物語るものでもある反面、彼女等を管理する側——ここでは伯母さん (Aunt) と呼ばれる女性であったり、司令官やその妻といったギレアデ人——も、どれほど人間が愚かになれるかということのパロディーと考えることもできる。

さらにまた、物語の予測される時代は、作者が最後に付記する、Historical Notes on *The Handmaid's Tale* により、21世紀前半に設定されているように思われる。しかし、時は未来に設定されていても、国全体の雰囲気や、登場人物の服装は、むしろ過去のピューリタン社会を思いおこさせるし、すべての出来事が過去の歴史と重ねて語られている。こうし

(5) 『聖書』(講談社 1980), p. 219. フェデリコ・バルバロ氏の解説

た未来と過去との重複は、過去、人間の犯した愚かな行為によって幾度ともなく誕生した恐怖と不安の国家は、またいつ何時でも出来上がる要素があることを、作者は示唆しているのではないだろうか。

3. 言葉遊び

主人公が侍女として派遣される家は司令官宅である。ここに到着して3日目に、主人公は、“*Nolite te bastardes carborundorum*”という文を、押し入れの中の壁で発見する。この文は何度となく、(第4章9, 第6章15, 第9章24, 第10章29, 第15章46) 主人公の頭をかすめ、前任者に対する脅迫概念ともなっている。この文をラテン語の文として読めば、“*Nolite*”は複数の否定を表わすが、次の“*te*”は単数であり、数として一致していない。*‘bastard’*には、私生児や偽物という名詞としての意味があるにしても、動詞で墮落させる、変質させる等があり、⁽⁶⁾“*carborundorum*”に至っては、そのものずぼりの単語は辞書にはなく、“*carborundum*”であれば、“*carbon*”と“*silicon*”の混合物、あるいは大変堅い結晶性の物という意味⁽⁷⁾になり、“*carborundo*”としてラテン語としてみれば、金剛砂ということになり、聖書の中では大切な物という意味に取れる。文全体からすれば、「自らの身を汚すな」位の意味だろうか。しかしどれも決定的な意味にはなりえない。そこで、第十章29では、主人公自らがその意味を司令官にたずねることになっている。司令官の答えは“*Don’t let the bastards grind you down.*” (p. 187) である。どうも作者が言葉遊びをしているようなのだ。

こういった言葉遊びは、その他の場面でも窺える。例えば第4章8に、“*Mayday*”を“*m’ai dez*” (“*help me*”) (p. 44) に使っている。そして次の引用文では、“*job*”についての言葉遊びにもっと広がりを見せている。

(6) O. E. D. Second Edition I p. 992.

(7) O. E. D. Second Edition II p. 883. 1892年以来使用

It's strange, now, to think about having a job. Job. It's a funny word. It's a job for a man. Do a jobbie, they'd say to children when they were being toilet trained. Or of dogs: he did a job on the carpet. You were supposed to hit them with rolled-up newspapers, though I never had a dog, only cats.

The Book of Job.

All those women having jobs: hard to imagine, now, but thousands of them had jobs, millions. (p. 173)

ここで“job”の意味は、男性の仕事や動物に使われていた基本的な生理現象を表わす名詞から、聖書の「ヨブ記」へ、そして女性の仕事へと、言葉遊びを通して変化している。作品の舞台背景となっている時代はフェミニズムの時代を乗り越えたものであるから、「ヨブ記」をはきんで、男性と女性の仕事の差を批判しているものではない。むしろ、戦争をしている男性が彼らの仕事を通して犬や猫と同一視されていることが注目される。犬猫には、次に連想される「ヨブ記」の主題⁽⁸⁾、「正義の神がなぜ正しい人を苦しめるのか」という疑問は抱かれまいだろう。しかし、動物とは区別され、ヨブの疑問を心に抱ける女性も、想像を絶するほど多く仕事を持っている。引用の最後の“millions”という言葉には、「国家資源」(a national resource p. 65)としてしか働かえない、アイデンティティーを喪失した状態に対する、主人公の不安と嘆きが窺える。

しかしながら、主人公が自分の窮状をこのような言葉遊びでほめかす行為そのものに、ほろ苦いけれども笑いが浮かぶ。それは、極限状態にありながら、その状態に屈することを拒否している人間の最後の抵抗ではないだろうか。こういう抵抗が感じられるのは、主人公が母親の思い出と共に、店のレジの傍に書かれていた“In God We Trust. All Others Pay Cash” (p. 173) という冗談を思い起こす場面である。ギレアデ国ではもは

(8) 『聖書』(講談社 1980), pp. 856-7. フェデリコ・バルパロ氏の解説

や紙幣は使われていない。従って、“Cash”と“God”を同程度に信用するというこの冗談は、ギレアデ国では冒瀆になりかねない。しかし主人公は、言葉遊びを通じてあえてそのような大それた考えを抱き続けているのである。

勿論、この言葉遊びは、主人公が司令官の妻の目を盗んで、司令官と行う言葉遊びである“Scrabble”と同質のものである。本来は子どもや老夫婦がするこの遊びが、主人公の知的遊びとして欠かせないものになっているということは、現状を抜け出す唯一の希望がいかに頼りないものであるかを強調している。しかし、たとえはかない希望ではあれ、それは完全な絶望では決してないのである。

4. ビルハのように

ヘブライの世界において自分の部族の繁栄を願い、子孫をもうけることは、人生最大の課題となっていたし、それができないことは、その家長及び家族が、神から呪われた者とみなされていた。従って、旧約聖書の中でヤコブの妻ラケルは、夫同様自分も、神に呪われた者とみなされないようにするため、夫に奴隷女ビルハを与え、子をもうけさせた⁽⁹⁾。婚姻の在り方を支えるこのような極めて“primitive”な考え方は、やがてモーゼの一夫一婦制へと至るに従い、次第に薄れ、その制度が社会一般の法律となった西欧諸国の現在においては、完全に喪失している。しかしながら、この“primitive”な考え方は人間の在り方に根源的に関わっているものであり、現在においてさえ、アラブ世界にはその流れが残り、この考えを抜きにしては理解できないような場面が生じている。

この作品では、侍女として司令官の家につかわされた主人公の仕事は、実は、司令官の子を宿し産むことであった。極端に出生率の下がったこの時代に主人公に与えられた役割は、旧約聖書からの上記の引例を思い出させ、キリスト教以前の考えに、我々読者を立ち返らせ、子孫繁栄という自

(9) 『聖書』「創世記」30章、1-8

然法にも似た、より太古の世界観へと導くのである。こうして喚起された“primitive”な視点は、一夫一婦制を当たり前としてきた、キリスト教的、西欧文明の文化に染まってきた主人公の考え方とは、著しい対比をなしている。

さて、子孫繁栄を目的として夜、床を共にすることは、一種の儀式としての交わりであるが、主人公が司令官と“Scrabble”のゲームを始めると、二人の交わりには儀式を越えた感情が加わってくる。しかし主人公は、实际的な利害を読み取ったしたたかな態度で、この変化をこぼむのである。

He almost did it [to reveal something that there was something between us now] the night of the Ceremony. He reached his hand up as if to touch my face; I moved my head to the side, to warn him away, hoping Serena Joy hadn't noticed, and he withdrew his hand again, withdrew into himself and his singled-minded journey...I'm sorry, he said. I didn't mean to. But I find it...

What? I said, when he didn't go on.

Impersonal, he said. (p. 162)

主人公はヤコブに与えられたビルハのように、儀式を儀式として終わらせなければならなかった。実際、儀式の最中に「触れられること」に甘んじれば、彼女は処刑される運命にある。従って、司令官がすでに自分を愛しいものと感じていることを知っていても、また、心の働きと無関係に感情を抑制することが、まさに、自分の置かれているピューリタンの社会的忌まわしい非人間性を実践することに他ならないと気付いていても、自分の生死がかかっているがゆえに、主人公は司令官から顔を背けなければならない。ところが、このように理性を優先する主人公の態度によって、司令官の僅かな自然な感情は殺され、司令官は彼自身の殻の中へ、一人きり

の心の旅へと戻ってゆく。もはや、主人公が、何を言おうとしたのと聞いても無駄である。“Impersonal”と答える司令官は、主人公との間に再び壁を立ててしまっている。

主人公は、愛情を感じあいながらそれを表わせない二人の人間の孤独でやりきれない状況を、淡々と語る。そこから感じられる寂しさや悲しさは、主人公が保身のために迎合しなくてはならない己れの姿を嘆く声に他ならない。人はこのように孤独であるべきではないという思いが、そして、孤独な人間が心を開く僅かな機会も許さないようなギレアデの国に対する批判が、この淡々と語られる場面から感じ取られるのである。さらに、人間と人間を結ぶ自然の愛情や、それを表わすことを妨げない自由に対する、主人公の秘められた渴望は、愛情なしの儀式に頼らねば生命が跡絶えてしまうが故に、夜の儀式が生まれたのであるが、実は、初めに愛や自由のような基本的な人間の権利が奪われてしまったことが、生殖という基本的な本能の低下の根本原因である可能性を示唆している。

5. 結 論

作者アトウッドが、非人間的な面を持つピューリタニズムについて受けた教育なしにはこの作品は生まれていなかったと思われる。高い理想を目標とし、転げ落ちる何かがある人間性の弱い部分を切り捨て、それを抑制あるいは統制する世界を作りあげたピューリタンの国家社会、ギレアデ国は、破壊されなければならなかった。そしてその原型である、幾度も騒乱や戦いを経てきた旧約聖書の世界は、作者アトウッドにとって、目に見えぬかも知れない愚かな人間の歴史書であったろう。そこに旧約の世界を生きた愚かなギレアデ人に対する作者の批判が窺われる。しかし作者は決して絶望しきっているわけではない。そこにたまたま生きた主人公は、愚かで弱いかもしれないが、常に自由への期待を捨てないで生きているからである。

この作品は、同じ未来小説でも、オルダス・ハクスレイ [Aldous

Leonard Huxley (1894–1963)』の *Brave New World* (1932)⁽¹⁰⁾ より現実的恐怖をかもしだす。さらに、時代は未来に設定されているが、全体の雰囲気は旧約聖書の世界を重ねることによって、長い歴史を経ても変わらぬ人間性を作者は見据えている。その上で、この絶望的とも言える愚かな人間の生き方にも、なお希望を持って生き続ける女主人公を描くことで、作者は一つの救いを提示していると思われるのである。

(10) 『みごとな新世界』機械文明や生物学、生理学、心理学の極度の発達によって、すべての人間的な価値が失われるに至った未来世界の恐るべき状況を批判的に描いた一種の反 Utopia 小説。題名は *Tempest* V. i. 183 の句。『英米文学辞典』より (研究社 1985), p. 149.